

令和2年6月1日

## 京口門だより NO.80

桃の節句、端午の節句もすぎ、コロナ禍のうちに梅雨の季節に入ってきました。「梅雨の海静かに岩をぬらしけり」(前田普羅)

コロナ感染症も第1次のピークがすぎ、規制が緩みかけると第2次の感染が心配になってきます。自粛規制が続くと会社でも学校でも人が集まることを避けることになり、会社ではコンピューターを用いたテレワークや学校でインターネット授業などか行われています。最近の言葉ではこのような状況をIoT(Internet of Things、物のインターネット)と言うそうです。とはいえ仕事でもテレワークのできない物づくりの製造業、手作りの仕事では不可能です。インターネット授業も自宅に居ながら受けられて便利ですが、体験してないので勝手に推測していますが、何か靴の裏から足を搔くような感覚があるのではないのでしょうか。

医療の分野でもインターネットによる遠隔診療が便利で普及するのではないかと言われますが、これもそう簡単に言えることでもないでしょう。例えば眼科や耳鼻科や婦人科などでの診療は難しいのではないかと思います。漢方治療でもできそうな場合とできない場合があります。よくこれまで診療してきた方では、電話で話を聞くだけで推量して判断することができますが、新しい患者

さんや直接診なければ判断しにくい場合は遠隔診療は無理と思います。前にも言ったかもしれませんが、漢方では望・聞・問・切の四診という診断法があり、視て聞いて訊ね、さらに切診といって脈や皮膚や腹に触れて診断しなければならないこともあります。脈診といって脈を丁寧にみるがありますが、ただ脈が速いか遅いか乱れているかなどをみるだけでなく、脈からいわゆる五臓六腑という漢方的な体の内臓の状態を推しはかることがあります。これは誰でもできることではなく、経験を積んで判断できるようになることですが、たとえば今日は寝不足か疲れているのか、胃腸を傷めているのか、ストレスで気持ちが傷ついているのか、少し風邪ぎみなのかなど推し量ることはできます。こんなことはお話しだけ聞いたり、顔色だけではなかなか判断できません。直接診察して診なければなりません。腹診といってお腹に触れて診察しますが、漢方的な大切な情報を知ることができます。

現代医学でも漢方医学でも最先端の遠隔診療にはすぐわない面もあるということです。IoTは便利ですが何でもできるというわけにはいきません。

